▶都心にあるナショナル・アーツ・センター

した支柱と飛び梁に支えられた厚さ一メートルの石造りの壁によって支えられており、周辺の小尖塔が全体をやわらげている。それは、ゴシック式の大寺院に付属した小会堂にも似ている。この図書館に使われている石材は、他の建物に使われているものと同じ淡黄色のネピア砂岩である。

議事堂関係の建物群の最後の部分として完成されたこの図書館は、時の総督ダブリン卿主催の大舞踏会によって正式に開館の運びとなった。一八七六年三月二七日、日暮れとともに馬車が次から次へと到着し、思い思いの衣裳を華やかに着飾った千五百人の賓客が、舞踏会場らしく装飾を施された上院議場に迎えられた。

一九一六年の大火

一九一六年二月三日。寒い冬の夜であった。午後八時五〇分ごろ、一人の議員が下院の読書室で新聞を拾い読みしていた。背中の方が妙に熱いと思って振返って見ると、何やらくすぶっているようす。議員は部屋を出て、議長宿舎の外で見張りについていた警官に、〝部屋の中がボヤだ〟と叫んだ。数分後には、部屋の中には入れないほどになっていた。

出火三〇分後に最初の爆発が起って屋根が吹き飛ばされ、一〇〇フィートもの火柱が天空高く吹き上げられた。爆発は五回つづき、やがて建物全体が火に包まれてしまった。出動した消防夫、警官、兵士たちが火とたたかっている間も、時計塔は夜の闇の中で時を告げる鐘を鳴しつづけていた。夜の十二時になって鐘が十一回鳴らした直後、時計塔が崩れ落ちた。かつての壮厳なたたずまいも、朝までにはねじ曲った鉄材と瓦れきの廃墟と化してしまっていた。

図書館は、幸い議事堂の間の防火扉の閉鎖が早かったため、大きな損害は免れることができた。しかし、下院の読書室には、希こう本の聖書やフランス統治時代にさかのぼる貴重な文書のたぐい四万冊が所蔵されていて、そのすべてが一九一六年の大火で灰となってしまった。

議事堂の再建

一九一六年九月一日、二度目の定礎式が、陸軍元帥コンノート公殿下の手で行われた。前回の定礎式は五六年前、殿下の兄君で、国王エドワード七世（当時は皇太子）の手で〝確実かつ真正に〟行われた。今回の定礎式では、カナダではじめて鋳造された金貨である、一九一二年鋳造の五ドル金貨と十ドル金貨、一九一六年発行のその他の貨幣、郵便切手、ならびに地方新聞などが礎石の中に封入された。

建築委員会は新しい議事堂が一九一七年秋までに完成し、引越しができるようになることを要請したが、この要請は建築技師から拒絶された。これだけの重要建築物がそんなに短期間に建築できるはずはない、というのがその理由であった。事実、新しい議事堂が正式に開会されたのは、やっと一九二〇年のはじめになってからのことであった。

第一次大戦が長引くにつれて、男たちは軍隊に召集されて海外に派遣され、請負業者も、例えばモントリオールのピーター・ライアル木工所のように軍需工場に転換させられるところもでてきただけでなく、ストライキ、鉄鋼その他の建築資材の不足、そしてさらにコストの上昇といったことが、建築を大幅に遅らせた主な要因であった。

一九一六年から一九二〇年の間に、労賃は一〇〇パーセント以上も上昇し、資材類も一四〇パーセントという驚異的な上昇率を示した。それでも、戦争中に行われた定礎式から四年たらずで、中央ブロックが使用できるところまでこぎつけることができた。

この新しい議事堂の特徴は何といっても平和の塔。この塔には、望楼、直径五メートル以上もある四面体の時計、カナダ軍人の名誉をたたえる戦没者追悼記念の間、そしてカリヨン（組み鐘）が組込まれている。パーラメント・ヒルに立つと、平和の塔のカリヨンから定期的に流れてくる演奏を聞くことができる。

平和の塔には、カナダの軍務に生命を捧げた男女のための戦没者追悼記念の間が設けられている。記念の間は平和の塔の正面入口の真上にあり、三方がステンドグラスの窓になっている壁面には、北アメリカの歴史にかかわりをもったすべてのフランス軍、イギリス軍ならびにカナダ軍のそれぞれの連隊記章が彫られている。この塔の建築技師は、在来のゴシック風装飾の代りに、こうした軍隊の記章を使ったわけである。

戦没者追悼記念の間の中央に置かれた聖卓には、祖国のために戦没したカナダ人の氏名を記載した戦没者追悼名簿が収められ、また、記念の間の床と壁には、フランスとベルギーの主要な戦場から運ばれて来た石がはめ込まれている。

▲議事堂前での衛兵交代式

カナダの議会議事堂とその両翼に建っている行政官庁の建築物は、全体で一つの建築群を構成する。オタワ川を見下ろす崖の上に建つこのゴシック建築群は、他に類のないドラマチックな環境を生み出し、堂々たる威厳と、特別な温か味と、そしてカナダ人の性格の一部である伝統的な寡黙さを示しているようでもある。この意味でも、カナダの議会議事堂は、ビンセント・マッセイ元カナダ総督がいっているように、〝国家のすばらしい象徴〟なのだ。